



『お気に入りの喫茶店』

自宅アパートの近くに喫茶店がある。

近頃は珍しい珈琲専門店だ。

初めて入ったのは大学2年の夏だった。

その年、たまたまゼミの合宿が近くの公民館を借りていた。

そこでのマクロ経済論のレビューが一段落した後、先輩に連れられて入ったのが最初だった。

以来、ここの珈琲とマスターの人柄がとても気に入って、就職する時も、一人暮らしのアパートはこの喫茶店に通える範囲を条件に探したのだった。

あれから毎日のように通いつめ、マスターとはすっかり顔馴染みになった。

9月29日、木曜日、19時。ようやく会社が終わった。

仕事で少しドジをやったボクは、低いテンションでカウンターに座る。

5分ほどでいつもの珈琲が出てきた。

いや、少し香りが違う。ふとマスターの顔を見る。すると、洗い終わったカップを拭きながらこう言った。

「ちょっと疲れているみたいだから。酸味の強いイエメンのモカ・マタリにしておいたよ」

ありがとう、マスター。

こういう気配りが、この店のもうひとつのメニューでもある。

『白櫨の樹』

トートバッグを肩から下ろし、空いた座席に座った。

顔を上げると向かい側の車窓を通して緑の並木が見える。街路に立つ白櫨が気持ち良さそうに秋の風に揺られ、のんびり枝を休めているようだった。

でも私は休んでなんかられない。来春は人生最大の岐路「大学受験」だ。あと少し、悔いのないように精一杯勉強するんだ。

バッグから授業ノートを取り出そうとしたそのとき、右側のドアから大きな荷物を持ったおばあさんが乗り込んでくるのが見えた。

あっどうしよう。席を譲ろうかしら。そのほうがいいよね。でも、あ、ちょっと待って。

次の瞬間、私の隣に座っていたOLさんがさっと立ち上がって、おばあさんに席を譲っていた。

私は取り出したノートをもう一度バッグにしまい、うつむいてしまった。耳が熱くなるのがわかる。なんだかとても恥ずかしく、そして情けなかった。

窓の外を見ると、白櫨の枝が「焦らないで」と微笑みながら手を振っているように揺れていた。

『ひと駅歩こう』

得意先のクライアントは忙しそうにしていた。

アポを入れていたはずの打合せは早々に打ち切られた。

いつもなら商談が終わったあとも、自分には興味の無いヨーロッパサッカーの話でもかと思かされるのだが、この時期よほど立て込んでいるらしい。

夕方、陽の高いうちに街へと放り出された。

このままオフィスに戻ってもすることがない。

目的もなく、ひとつ先の地下鉄の駅に向かって歩き出した。

古い商店街の中をぶらぶらと歩く。

蕎麦屋のお品書きに見入ったり、街路樹の電飾にプチ感激したり。よくみると、街中ってけっこう刺激的だ。

そういえば彼女、今日は早番だから夕方から空いているって言ってたっけ。

よし決めた。

電話をせずに突然訪ねてみよう。偶然仕事が早く片付いてね、なんて。

彼女、どんな顔するだろう。

ひとりニヤけながら歩調を早める。

大きな料亭の庭にあるもみじのクリームゾンが鮮やかだ。

紅葉、いや、散歩の秋かな。

『隣で晩ごはん』

アパートのお隣、カノンさんの部屋で晩御飯をご馳走になることになった。

玄関から声を掛けると奥の方から返事が聞こえる。

「いま準備しているところだけどもう少しかかるから。入って先にビールでも飲んでて」
では、と特段遠慮せずにリビングへと向かう。

彼女は一人暮らしだ。

部屋は意外なほど物が無くすっきりと片付いていて、掃除も行き届いていた。

彼氏はあるのかなと無遠慮な想像もしてみるが、余計なお世話と思い直してゆったりとソファに座りなおす。

所在無さに、なにか手伝いますかとまた声を掛けてみるが返答がない。仕方なく黙ってビールを飲みながらテレビのスポーツニュースを眺めていた。

天気予報のお姉さんが台風の接近に注意を呼びかけているところで料理が運び込まれた。

鶏肉とカシューナッツ炒め

北海道ほっけの開き焼

里芋と蒟蒻の煮物

薄切り蓮根の胡麻和え

ほうれん草の御浸し

しめじのご飯としじみ汁

添えられたエイヒレの炙りが香ばしい。

目と鼻を楽しませてくれている美味しそうな料理を前に、ビールの次は純米か芋焼酎か、なんて考えてるボクはきっと幸せモノなんだろうね。

『雨の日のアクシデント』

フロントガラス越しに見える景色がひどく歪んでいる。

モノトーンの風景がぼやけて見えるのは、涙のせいじゃない。およそ1ヶ月ぶりの雨、それも激しい豪雨のためだ。

アタシはワイパーのスウィングスピードを上げ、ライトを点灯した。

白いガードレールが突然目の前で大きくなっては右へ左へと飛んでいく。BMWが大きく傾くと、バックミラーに下げている住吉大社のお守りが激しく揺れる。

「雨の道路ってのは、降り始めが一番滑りやすくて危険なんだ」

そう言ってちょっと怖い目をする彼の優しい顔を思い出す。

いけない。まだなにも考えちゃダメ。運転に集中よ、集中。油断すると涙がでそうになる。けど、余計なことは考えない。

カーブに差し掛かるたびにパッシングをして対向車に合図する。

30分前、病院からの電話を受けたころはまだ傘もいらない程度だったけど、いまはもう道路脇のあちこちで水溜りがフラメンコを踊っている。

何度目かのパッシングの後、ようやく視界に白い大きな建物が見えてきた。カーナビに「北原市民病院」の文字が映る。

—あんなに冷静なアナタがどうして—

病院からは、もらい事故と聞いていた。慎重でいいヒトほど死神に好かれるって聞いたことがある。けど、アナタはワルよね、死神にも見放されるくらいに。

助手席に放り出した携帯が鳴りはじめた。

『仕事が終わって』

11月の水曜日の午後8時。

仕事が終わって、6歳年下の新人を連れてオイスターバーに入った。

駅近くのオフィスビルに最近できたばかりの店だ。40種類近くの国産の牡蠣が食べられるという触れ込みを聞いたが、味の方はどうなのか。今日は後輩くんを連れて試食のつもりだ。

まずは赤ワインと14番の牡蠣を注文する。

店内は薄暗いが、テーブルごとに明るく照明が当たっているのがいい。おいしい料理が目でも楽しめる。照明の明るさは料理に対する店の自信の表れでもあるのだろう。

すぐに出てきたグラスワインには手をつけず、いっしょに注文した奥松島産の牡蠣を待つ。

しかし後輩くんは、さっきから何も言わず水ばかり飲んでいる。少し緊張気味の様子だ。

アルコールは後回しにして牡蠣をしっかり味わいたかったが、彼をリラックスさせるほうが優先かな。そう思った瞬間、店内の巨大水槽の海草が、うなずくように大きく縦に揺れたのが妙におかしかった。

さ、じゃきみ、グラスを持てよ。

まずは、今日の俺たちに乾杯。

『がんばってというひとたちへ』

両親や先生や友だちから、がんばれって、いわれます。

あなたならできるよ、きっと大丈夫だよ。

ここまでできたんだ、あともう少しだ、もうちょっとだよ、って励まされます。

もっとがんばって、っていわれます。

よくがんばってきたね。あともうひとふんばりだよ。まだいけるよ。

がんばれ。がんばれ。もっとがんばれ。

とても、疲れました。

わたし、いままでがんばっていなかったのでしょうか。がんばりが足りないのでしょうか。

自分では充分がんばってきたつもりなのに。

精一杯なのに。

これ以上、どうやってがんばればいいのか。

がんばれって、いつくれるひとたちへ。

わたし、もうがんばれません。

これ以上、わたしを追い詰めないでください。

わたし、もう、がんばれない。

『占いがほしければ』

あたしの占いはね、ほかと違って単純じゃないんだ。

手相と占星術と風水が入り混じってる。説明してもたぶん誰も理解できないよ。

だからあたしは占いの結果しか伝えない。信じるか信じないかはあんたの自由さ。

ふん。

そうかい。若いころはだいぶ無茶やったようだね。よく今日まで生きてこられたね。なにかまだ大きな役割があるってことみたいだね。

そうさ、生かされてるのさ。

車の事故で死にそうになったのは1回だけじゃないね。ラッキーだったのさ。もちろん、ツキを呼び込むのも運だけどね。

ああ、そういう星の下に生まれてるってこと。あんた、この世でまだやるものが残ってる。

結婚はできるよ。

ただし、だいぶ年をとってからだ。子どもは諦めな。そういう星じゃない。

相手？ 喜びな、女性だよ。はは、相手の女性のひととなりまではわからんさ。

気に入った人がその人だろうね。駆け落ちだの不倫だのはなさそうだから、結婚に関しては平凡だよ。安心しな。

ただ、子どもに恵まれないから老後は注意したほうがいいね。きちんと財産の管理や老後の生活計画を立てておいたほうがいいよ。老いぼれたあたしがいうのもなんだけどね。

え、さっきの話？

ああ、役割があるって話かい。

ふん。知りたいって言われてもね。そこまではわからないね。ま、わかっても伝えないのがこの業界のルールってのもんでもあるがね。

なぜって？

教えることで、未来が狂っちゃうことがあるからさ。ここまでしか言えないね。あとは自分で考えな。

さて、どうする？

この先も視るかい？

占いは、当たるも八卦当たらぬも八卦。

こんなばあさんの戯言に振り回されずに、自分の思うようにやったらどうだい、一度きりの人生
なんだから。ってのがあたしの本音なんだけどさ。

『青い夜』

地面の固さとたくさんの虫の音が気になって寝付かれず、テントの外に出た。
虫の声はこおろぎの類だろうか。草のにおいがとても濃いけれど、嫌いなにおいじゃない。

携帯を見ると時刻はもう深夜1時だ。

2時間もシュラフの中で寝返りをうっていたことになる。さすがに首が凝った。腰も痛い。
見上げると、プラネタリウムでしか見たことがないような無数の星たちが空を覆っている。星が近い。ゆらゆらと、明るくなったり少し暗くなったりする。
またたくってこういうことかと、初めて林間学校に来た都会の小学生のように素直に感動した。
月は。月はどこだろう。森の木々に隠れているのだろうか。きょろきょろとあちこち探してみるのがにわかには見つからない。

雉を撃ったら月を探しに散歩でもしてくるか。

暗い森のほうへ歩き出そうと前を見ると、隣のテントのすぐ脇の草原に仰向けになって空を眺めている男がいた。
頭の後ろで両手のひらを組み、足を大の字に広げ、いかにも気持ちよさそうに寝そべっている。
動かない。眠っているのだろうか。
気になってじっと目を凝らしてみると、近くに寄るまでもなく、すぐに正体がわかった。規格外の身長と、ただのキャンプ場なのに登山靴。幼馴染みのリョウだ。
近づいていく足音で、やつもこちらの存在に気づいたようだ。

「どうした。ママが恋しくなったか」
周りを起こさぬよう、静かに声をかける。
「明日の株価が気になって寝れなくてな」
小さくて低い声で応えてくる。目が笑っている。

リョウの隣に腰を下ろし空を仰ぐ。

「夜の空って、意外と明るいな」
相変わらず草の香りが全身を包んでいる。ときどき木々が揺れてざわざわと音を立てる。虫の音がする。心地よい風がうなじを撫でていく。空では砂つぶみたいな星たちが楽しそうに瞬いている。
青以外の色彩の無い、ネイビーブルーとロイヤルブルーの世界。
今夜、月はいらない。

『蕎麦屋』

この季節、秋の紅葉が間近な信州戸隠地方に、比較的新しい蕎麦屋がある。

5年前、定年退職したご夫婦が古民家を改築して店舗にした平屋で、20畳ほどの狭い座敷にテーブルが3つだけ並んでいる。

ご主人曰く、隠居の場所として戸隠を選んだ理由は「水がいいから」。山からの雪解け水。天然のミネラルが豊富。水が生きてる。

地元戸隠と黒姫産の蕎麦を独自の配合でブレンドした蕎麦は香り豊か。透明感があって細麺だがコシがある。しかし硬すぎない。

出汁は利尻昆布と土佐鰹。蕎麦に負けない風味と旨味。

メニューはふたつだけ。「蕎麦（温）」と「蕎麦（冷）」。一日限定40食。

ただただおいしい蕎麦が食べたい人のための隠れたお店だ。宣伝する気はないようでどこにも紹介されていない。

人から人へ。お店の存在はうわさで伝わるのみである。

旨い。ただひたすらに。

東京から半日かけて食べにくる常連もいる。

その蕎麦は人生の味がする。